

自立訓練を経て就労移行支援を利用し

一般就労につながった事例の報告

かがわ総合リハビリテーション成人支援施設

就労・生活支援員 松本 香里

サービス管理責任者 上川 毅、諏澤 友紀子

職業指導員 山口 和彦、森田 拓哉、吉川 早苗

キーワード： 自立訓練、就労移行支援、就労定着支援、一般就労

要 旨

脳出血後遺症により、上下肢機能の障害・高次脳機能障害等を伴う場合、復職することが難しく、新たな就職先探しは更に困難を伴うケースが多くみられる。重複障害のある方が、当施設自立訓練、就労移行支援、施設入所支援を利用して一般就労し、その後も就労定着支援を行うことで、安定した職業生活を送っている事例を通じ、段階に応じて適切な支援を行うこと、身体機能、高次脳機能障害双方に対する支援の必要性を確認できた。

1. はじめに

かがわ総合リハビリテーション成人支援施設では、施設入所支援、自立訓練（機能訓練・生活訓練）、就労移行支援、就労定着支援を行っている。施設入所支援では、日中活動の通所利用が難しい場合に、生活の場や生活自立に向けた訓練の場として利用している。

機能訓練では、交通事故や脳血管障害などにより身体に障害のある方を対象に、身体機能や体力の向上、日常生活能力や外出能力の向上、趣味の開発などの訓練を行い、地域で自立した生活ができるよう様々なリハビリテーションを実施している。生活訓練では、高次脳機能障害のある方、発達障害者を対象に、日常生活能力の向上や社会参加を支援する生活訓練を行っているが、身体と高次脳機能障害を併せ持つ複合的な障害のある方には、機能訓練、生活訓練の枠を超え、双方から必要な支援を行っている。

就労移行支援では、身体・知的・精神障害・難病の方を対象に、一般企業での就労・復職・在宅就労

を目指し、必要性に応じて、事務系と作業系の訓練を行っている。事務系では、パソコンや書類整理等一般的な事務仕事に必要な訓練、作業系では、軽作業、仕分け、品出し等、主に身体を使う仕事の訓練を行う。障害別ではなく、全ての利用者が基本的に同じ環境下で訓練を行い、作業チェックも訓練生同士で行うことで、訓練を通してコミュニケーションの取り方を学べるよう考えている。清掃・ベッドメイキング・園芸・アンガーマネジメント・ビジネススキル・メンタルヘルス等外部講師を招いた講習もあり、職場実習等も積極的に行っている。

就労定着支援では、定期的な職場訪問等を通して、本人の仕事や生活の様子を確認し、本人の不安や希望等を企業に伝え、また、企業が心配していること等を本人に伝えて問題の早期発見、解決を支援することで、職場定着を図っている。

2. 倫理的配慮

倫理的配慮として本研究は、かがわ総合リハビリテーションセンターの倫理委員会で承認を得た。

3. 事例紹介

A氏、40代男性、脳内出血による右上下肢機能全廃、高次脳機能障害、失語症。

発症後、急性期、回復期リハビリテーション病棟を経て、成人支援施設自立訓練・施設入所支援を利用開始した。父親が脳内出血で中学の時死去し、高校進学を断念。卒業後は溶接工として社員寮に住み込みで発症まで働いていた。

回復期リハビリテーション病棟退院時、FIM 115点、Br.Stage III - III - III、TMT-A 46秒、TMT-B 60秒、MMSE 26点/30点、FAB 13点/18点、リバーミード行動記憶検査14点/24点。短期記憶の低下や失語症が作業場面や情報処理に影響を与えていた。

4. 支援の状況

(1) 自立訓練

日課の参加状況は良く、特に外出訓練と失語症を対象としたコミュニケーションプログラムの取り組みは熱心であった。ADLは自立しており、復職の支援と通勤手段の確保を当初の目標とした。しかし、職場から片麻痺での受け入れは困難と退職勧告を受け、更に、自動車運転の再開も母親の拒否感が強く、能力的には可能だったが断念することとなった。自信、目標を喪失し、元来内向的な性格だったこともあり、誰とも話しをしない状態が続いた。「自分は仕事はもうできないと考えていたし、失語症により、上手く喋ることができず、人と話すのが怖い、恥ずかしいと考え、話したくないと思っていた。」と当時を振り返って話していた。

その頃、相部屋となった利用者を中心に、趣味の漫画を通じて人間関係が広がった。また、他の利用者と休みの日も連絡を取るために、これまで遠慮していた母親に携帯電話を使いたい旨を伝えることができた。関係の良い利用者が就職することを知り、本人も徐々に働くことを希望するようになった。そこで働くために必要な事として、通勤手段、生活の場所を確保し、入所から通所の切り替え、最終的には就労移行支援利用を目標とし

た。通勤手段は公共交通機関を利用し、生活の場所は母親との同居を選んだ。

(2) 就労移行支援

新たに一般就労を目指すためには、沢山の課題があった。課題ごとに個別に見ていく。

まず、右片麻痺での作業技術取得について、どの作業も始めはうまくできず、時間もかかっていた。同じ片麻痺のある先輩訓練生から作業方法を教えてもらったり、職員と効果的な自助具の使い方を考えたりしながら、少しずつできる作業を増やし、スピードも意識できるようになった。(図1) また、当初は消極的だった清掃講習も、片麻痺でも清掃で就職した人の事例を伝える等働きかけ、受講となった。



図1 滑り止めマット、洗濯ばさみ、空箱利用し、片手で箱折りを行えるように

高次脳機能障害に対しての代償手段の獲得のため、日課として取り組んでいる、ニュースをピックアップしそれを正確に書き写す「書き写し課題」(図2)、その日の訓練の内容と振り返りを行う「自己管理ノート」(図3)の記入を行った。毎日の振り返りの定着から、高次脳機能障害による記憶力の低下が徐々に認識できるようになった。また、書字の上達、メモの必要性の理解双方が向上し、メモの習慣化につながった。

失語症による発語のしにくさ、伝わりにくさの改善について、毎日の朝礼で就労標語(図4)を復唱しており、言葉をしっかりと発音する練習になるとともに、挨拶に関する標語があったことで、挨拶

擲の意識づけにもなった。グループワーク、朝礼・夕礼の司会を行う等により、人前で話すことにも慣れていった。また、自立訓練の利用者向けに、自立から就労にステップアップした経緯を発表することで、自分の意見をしっかりと伝え、人前で話すことへの自信につながった。入所当初は伏し目がちで、仲の良い方以外とはコミュニケーションをとることが少ない印象だったが、誰にでも積極的に挨拶をする等、明るい印象へと変わっていった。

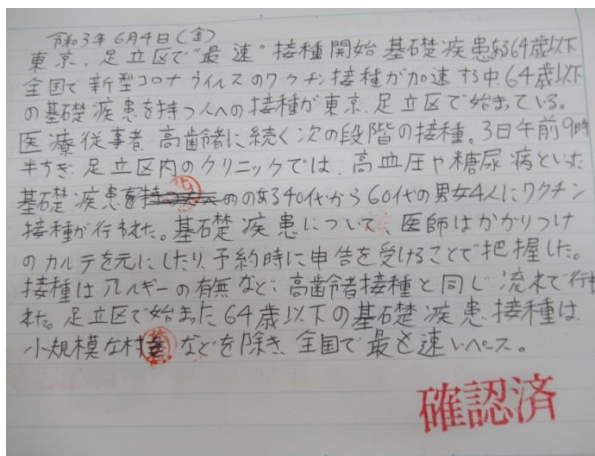


図2 書き写し課題

自己管理ノート	
項目	内容
個人情報	氏名: [] 性別: [] 年齢: []
健康情報	病歴: [] 服薬: [] アレルギー: []
生活情報	職業: [] 収入: [] 家族構成: []
学習情報	学習内容: [] 学習時間: []
その他	[]

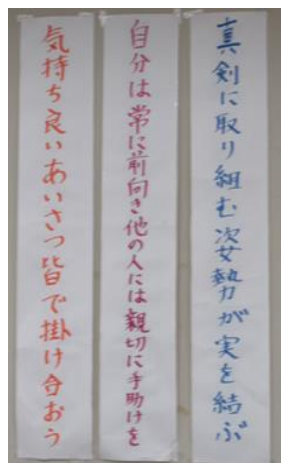


図3 自己管理ノート 図4 就労標語

これらの訓練を続け、就労利用開始から9ヵ月目、事務補助作業をメインとするB社の職場見学に行き、実習の依頼をした。しかし、B社は身体障害者の雇用実績はなく、身体障害者の初めての受け入れに大きな不安を感じている様子があった。特に、トイレに行く際、狭く段差の大きい階段を使用しないと行けない等、一人で移動することへ

の不安が大きい様子だった。そこで、トイレの移動は、手すりの使える下りについてのみ階段を利用し、上りはエレベーターを使用すること等、双方が安心して取り組める方法を話し合った結果、企業の不安も軽減し、実習の受け入れが可能となった。

実習前の準備として、通勤経路の確認、持参する自助具の選定、実習時の作業を想定した訓練を集中的に行った。実習時には、支援員が定期的に訪問し、毎日電話でその日の報告を受けた。片麻痺でも自助具を適所に使用することで軽作業ができること、きれいな字が書けること、社内清掃もできるということが企業担当者に伝わり、実習振り返りでは、担当者から「疑問点を臆せず質問できた」、「ミスが少ない」、「作業内容を自分で図に書いてメモしていた」等高い評価を受けた。企業担当者の表情が、実習前後で、不安そうな様子からにこやかな表情に変わっていたことが印象的であった。その後、採用面接を受け、ゆっくりながらも自分の言葉で質問に答えることができ、「利き手でないにも関わらず、履歴書の字がとても丁寧で読みやすい」との評価と共に、正式採用となった。(図5)

履歴書資料 前職ではマシン製造の仕事をしていたので溶接の知識・技術があります。	スポーツ 野球(外野手でライトをよく守っていました)
趣味 ウォーキング(1時歩き回っています) 絵手紙(野菜や果物などを書いています)	健康状態 良好(脳出血による右下肢機能全廃)
<p>本日の勤務: []</p> <p>5日間の実習を経験させていただき、片麻痺の自分にとって工夫をすることで作業が行えることに達成感とやりがいを感じました。また同じ職場の社員の皆さまから、片付けを手伝って頂いたり緊張している自分に温かい言葉をかけてもらえ、安心して働ける職場だと感じることができました。就労移行支援では常に丁寧な作業とスピードを上げる工夫を心掛けており、今後は業務を通じ実践することで御社に貢献していきたいと考えております。</p>	
本人希望記入欄(特に給料・職種・勤務時間・勤務地その他について希望があれば記入)	通勤時間 約 1 時間 00 分
言葉がっまる失音症をもっているため、報告や連絡の際、聞き取りづらさや時間を要します。ご理解の程、お願い致します。2ヶ月に一度発給のための午前中のお休みにさせていただきます。	就業率(配属者を除く) 0 人
配属者 []	配属者の扶養親族 []

図5 実際に提出した履歴書

(3) 就労定着支援

就労移行支援6ヵ月間のアフターフォローを経た後、現在は就労定着支援を利用中である。月一回程度支援員が職場訪問し、長く安定して就労生活を送ることができることを目指している。緊急の困りごとの際には、電話やメールで適宜連絡を

取り、支援員による訪問回数を増やすなどし、早期解決に向け対応している。A 氏の仕事内容は、就職当初単独作業だけだったが、現在は、共同作業や他社員の検品を任されるようになっていく。

(図6) 社内には、障害特性から、ミスを指摘されると委縮してしまう社員もいるが、A 氏は穏やかにミスを伝えるので安心して任せられると、会社からの信頼も厚い。就労移行支援で、様々な障害の方と同じ環境下で訓練を行い、訓練生同士で作業チェックをしていたことが活かされていると感じる。また、身体障害を持つ A 氏が入社したことにより、他社員が社内を急いで移動しなくなる、できない作業は補ってあげようとする等、社内が良い変化をもたらされている。

A 氏は、受傷時には将来のイメージができない状態だったが、自立訓練で家庭復帰をし、就労移行支援を経て就職し、今は働くことがとても楽しいと話している。



図6 手前の二人が行った作業を、A 氏が検品し奥の人が束ねて梱包している様子

5. 考察

中途障害となった者は、身体機能を元に戻したい、身の回りのことを自分で行いたい、家庭、地域で暮らしたい、復職、就職等社会活動への参加をしたい等、時間の経過を経て課題、目標は変化していく。その段階ごとに、葛藤し、混乱し、適応しようと努力し、受け入れるという経緯をたどる。

成人支援施設では、各事業の職員間の連携を図りながら、段階に応じた課題、目標に対し、切れ目なく適切なタイミングで支援を行えるようにし

ている。

そのため、利用者は、施設入所支援を利用して行く間に、自立訓練通所者の様子や、就労移行支援の雰囲気を感じる事ができ、利用者間の交流もあるため、自らが取り組む訓練等の見通しが持ちやすくなる。

脳出血等による後遺症から片麻痺となり、高次脳機能障害を伴う場合、社会参加としての一般就労は困難を伴うことが多いが、回復期病棟退院後、当施設で、その時々課題に応じて訓練を受け、現在も安定した職業生活を送ることができているA 氏の事例を通じ、段階に応じた適切な支援を行うこと、身体機能、高次脳機能障害双方に対する支援の必要性が確認できた。

一方、現状として、重複障害を持った者が即マッチングできる就職先は少なく、賃金面でも健常者の一般レベルに比べ低いことがある。このような課題改善のためにも、今回のような段階に応じた支援による成功事例を複数作ることで、重複障害のある方が就労可能なことを一般企業にもアピールし、就職先を増やすとともに、少しでも多くの障害者の社会参加を増やしていきたいと思う。

【出典先】

令和3年度かがわ総合リハビリテーションセンター
研究年報